

## 平 岩 千 代 治 (1921~1975/日進)



### 1 秀才少年

平岩千代治は、現在の碧南市東浦町に父五代目七之助、母かつのの長男として大正10年(1921)6月8日に生まれた。

平岩家は、天保8年(1837)、「七之助商店」として創業した老舗の造り酒屋であった。現在では八重酒造味淋株式会社となっている。

千代治の子どもの頃は、蔵人がたくさんいた造り酒屋で、裕福な家庭であった。千代治は幼いときから物覚えがよく、いたずらもしなかったのも、親が「叱る」ことも、「勉強しなさい」ということもない、世話のかからない子どもであった。

千代治は地元の旭村立日進尋常小学校を卒業し、昭和14年(1939)年3月に、飛び抜けて優秀な成績で、愛知県立刈谷中学校(旧制)を卒業した。

### 2 48倍の難関校、海軍経理学校に入学、首席で卒業

千代治は、当時優秀な生徒が集まる海軍経理学校を志願した。48倍の志願者の中から、難しい試験を突破し、昭和14年(1939)12月、希望の海軍経理学校に入学した。海軍経理学校は、当時の若者があこがれる7つ釦の軍服が制服であるエリート校であった。

昭和17年(1942)11月、千代治は海軍経理学校を首席で卒業した。首席で卒業する生徒は、当時最大の榮譽である天皇陛下から短剣を賜うことができた。

### 3 海軍のエリートコースを進む

海軍経理学校を卒業後、同年戦艦伊勢、翌昭和18年(1943)には、連合艦隊旗艦(艦隊の司令長官・司令官の乗っている軍艦)大和に、翌昭和19年(1944)に海の飛行場と言われた最新鋭航空母艦大鳳に乗艦勤務した。これは、海軍のエリートコースであった。

### 4 人間味あふれる海軍教官

その後、千代治は母校海軍経理学校の教官として勤務した。軍国主義時代の中で、千代治は人間を大切にすることをした。一例をあげると、軍隊では、精神教育の名のもとに鉄拳制裁が常識となっていたのに、千代治は生徒に手を出さなかった。

また、精神力を高めるといって、夜中に臨時に生徒を集める教官がいる中で、彼の場合は逆に生徒が訓練で疲労しているときは、普段より1時間くらい起床を遅らせることが度々あった。

その後、多くの卒業生が千代治を慕った。戦後、政財界で活躍した、元大分県知事平松守彦、元地方港湾審議会長藤井隆(名古屋大学名誉教授)などは、その代表である。

### 5 日本興業銀行、日本瓦斯化学から日本スチレンペーパーを設立

戦後、千代治は一橋大学を優秀な成績で卒業し、日本興業銀行に入行した。その後、海軍の先輩の榎本隆一郎に誘われて、榎本が設立した日本瓦斯化学に入社した。

昭和 36 年 (1961)、千代治は管理部次長として訪米した。そこで、サンケミカル社の技術導入をし、その技術を生かした会社の設立構想を立てた。そして、日本スチレンペーパー (現 JSP) を、榎本 (社長) と共に設立した。千代治は 40 歳で新会社の総務部長に就任した。

## 6 先を見る経営者

当初、会社は赤字続きであったが、これを千代治がうまく黒字化した。昭和 45 年 (1970)、千代治は専務取締役になり経営の中核を担うようになった。栃木県鹿沼市の用地を買収し、工場を設立して事業拡大をした。さらに昭和 47 年 (1972)、事務合理化のために、いち早くコンピュータを導入した。

## 7 ベンチャー企業の走り

昭和 50 年 (1975)、千代治は日清どん兵衛などのドンブリ容器を生産する日本ザンパック (株) を設立した。この会社は日本スチレンペーパーの子会社で、日清どん兵衛の売り上げ向上を受けて、会社の利益は増加していった。千代治の経営のやり方は、日本ザンパック (株) のように、一つの製品が開発されると、それを生産する会社を設立し、そしてその会社を育成した。今でいうベンチャー企業の走りであったとも言えよう。

## 8 高機能発泡樹脂で、流通や安全の強化に影響

千代治は今日、スーパーマーケットなどで見られる刺身トレーやプリンスメロンの緩衝包装材ミラネットなどの普及を推進し、商売や輸送方法に大きな影響を与えた。

ところが昭和 50 年 (1975)、千代治は 54 歳の若さで交通事故の後遺症のため急逝した。千代治が計画した世界で初めての耐熱・強度のポリプロピレンは、死後まもなく完成し、自動車のバンパーの芯材などとして今日多く使用されている。

## 9 昭和の三河武士

千代治はいつも目標に向かって真剣で前向きに進んできた。実業界に入ってから会社一筋に命をかけた。朝早くから夜遅くまで会社のために働くので、休日は翌日からの仕事のために家庭でモーツァルトなどを聴き、英気を養った。

千代治は、他人に対して温厚で、説得力ある話し方をした。子ども達は、叱られた記憶がないと話している。また実直な人柄で、自分で企画し、責任をもってそれを実行した。教え子の一人藤井は、「昭和の三河武士」と語っている。しかもその目的は自分のためにではなく、会社や国のためにであった。戦中と戦後では、千代治の仕事は 180 度違うように見えるが、実は軍人として企業人として、常に「国家社会のため」という一貫した信念が流れていたのである。

千代治は上の者がいばる軍国時代でも謙虚で奢りがなかった。また、実業界時代には石油ショックで会社が危機になったときに、病気でありながら、危機をはねのける強い精神力をもっていた。千代治には、「真のリーダー」という言葉がよく合うように思われる。

### ◆もっと知りたいなら

・『平岩千代治の話』

(平 17 市史料別巻 2 水野利亮)

・『平岩千代治』

(平 17 季刊誌「みどり」水野利亮)